氏　　名	寺川(神吉)優美（てらかわかんき　ゆみ）
学位(専攻分野)	博　士（工　学）
学位記番号	工　博　第2555号
学位授与の日付	平成17年7月25日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当
研究科・専攻	工学研究科環境地球工学専攻
学位論文題目	自立高齢者の生活展開からみた養護老人ホームにおける個室・ユニット化導入の効果
論文調査委員	（主査）教授 髙田光雄　教授 小林正美　教授 吉田治典

論文内容の要旨

本論文は，現在，高齢者居住施設における個室・ユニット化が普及期に入ったことを踏まえ，心身機能の高い高齢者を対象とした調査を通して入居者の個々のニーズをより直接的に把握することから，個室・ユニット化導入の効果を入居者の視点から検証するとともに，入居者の自律的かつ社会的な生活を実現可能とする空間構成に関して考察した成果についてまとめたものである。具体的には，多床室・ホスピタルモデル型養護老人ホーム（以下，旧ホーム）の建替に伴い，個室・ユニット型養護老人ホーム（以下，新ホーム）に環境移行した自立高齢者を対象として調査・分析している。本論文は全6章から構成されている。

第1章は序論であり，高齢者居住施設における個室・ユニット化導入の経緯を概観し，個室・ユニット型施設に関する既往研究を検討した上で，本論文の目的および方法について述べている。

第2章では，養護老人ホームの全国的概況を述べた上で，本論文の調査対象施設の概要について説明している。

第3章では，多床室・ホスピタルモデル型の旧ホームを調査対象として，入居者の生活展開の実態を同室者との関係に着目して分析している。その結果，入居者は居室内でテリトリーを形成して同室者と棲み分け，また同室者よりも他室者とより頻繁に交流し，居室内においても同室者と極力関わりをもたないようにしており，居室内に他者がいるというプライバシーが確保されていない状態において，入居者は望ましいプライバシーレベルに近づける行動メカニズムを働かしている実態を明らかにしている。

第4章では，個室・ユニット型の新ホームを調査対象として，行動観察調査およびインタビュー調査を通して，入居者の行動をその背景も含めて把握している。その結果，入居者の生活拠点である所属ユニット内では，入居者の滞在場所および行為は，諸室の位置関係，行為を誘発するソフトに加え，同じユニットに所属する入居者の影響も受けていることを明らかにしている。また，入居者はユニット内全体，その中でも特に入居者の滞在の多い食堂の様子を把握したいという欲求を抱いており，食堂が見通せる小上がりや廊下ベンチがこのような役割を果たしていることを示している。所属ユニット外の利用について考察した結果，他ユニットの利用には他者との交流という目的が確認され，施設共用空間では滞在時に偶発的に他者と出会って会話が発生する事例が捉えられている。また，屋外を利用する入居者は少なく，外出する者であっても地域住民との交流に至る事例が極めて少ない実態を捉えている。

第5章では，旧ホームから新ホームに環境移行した同一入居者を対象とした時系列的調査から，個室・ユニット化に伴う入居者の生活展開および意識の変化を捉えている。まず移行1ヶ月前，1ヵ月後，8ヵ月後の3度にわたり実施したインタビュー調査から，時間の経過に従って個室化に対する評価は高まるが，ユニット化については入居者により評価が分かれ，集団の小規模化により人間関係が閉塞的になる可能性が指摘されている。さらに，移行4ヶ月前および4ヵ月後に実施した行動観察調査およびインタビュー調査に基づき，入居者の生活展開の変化を分析した結果，個室・ユニット型の新ホームでは，自室が他者に気を遣わずに休息できる場，読書等の趣味に集中できる場としての意味合いが増し，共用空間は炊事を行

ったり，他の入居者やスタッフと交流する等，積極的に行動する場としての意味合いが増していることが明らかにされている。すなわち，入居者は行為により場所を選択しており，個室・ユニット化により自律的で社会的な生活が可能となったことを示している。

第6章は，結論であり，本論文で得られた成果について要約している。

論文審査の結果の要旨

本論文は，現在，高齢者居住施設における個室・ユニット化が普及期に入ったことを踏まえ，養護老人ホームとしては全国初の個室・ユニット型施設を調査対象として，行動観察調査およびインタビュー調査に基づき入居者の行動をその背景も含めて把握することにより，個室・ユニット化導入の効果を検証するとともに，入居者の自律的かつ社会的な生活を実現可能とする空間構成に関して考察した成果についてまとめたものである。得られた主な成果は次のとおりである。

1．個室・ユニット化により，自室は他者に気を遣わずに休息できる場，共用空間は炊事や交流等積極的に行動する場としての意味合いが増す実態を捉え，入居者の生活がより自律的かつ社会的になることを明らかにした。

2．個室・ユニット型施設では，時間の経過に従い個室化の評価は高まるが，ユニット化については，入居者により評価が分かれ，集団の小規模化に伴い人間関係が閉塞的になる可能性を指摘した。

3．多床室・ホスピタルモデル型施設でみられる他者との関係を遮断する行動メカニズムが，個室・ユニット型施設では，他者と関わるか関わらないかをコントロールする行動メカニズムに変容することを明らかにした。

4．自室と食堂の間にある小上がり等のセミプライベート空間，およびユニットの結節点に設けられたホール等のセミパブリック空間が他者との関係をコントロールする上で活用されていることから，より社会的な生活展開を可能とするためには，空間要素の結節点のデザインが重要となることを提示した。

以上本論文は，入居者の個々のニーズを直接的に把握することから，個室・ユニット化導入の効果を検証するとともに，個室・ユニット型施設の空間構成を考察したものであり，学術上，実際上寄与するところが少なくない。よって，本論文は博士（工学）の学位論文として価値あるものと認める。また，平成17年6月23日，論文内容とそれに関連した事項について諮問を行った結果，合格と認めた。